

## 水戸祇園寺蔵『野節文章』大概（三）

大庭, 卓也  
日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/8975>

---

出版情報：文献探究. 41, pp.43-55, 2003-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 水戸祇園寺蔵『野節文章』大概(三)

## 前言

大正五年春頃、夏目漱石が手帳に書き付けた俳句一六句の内に、

桃に琴弾くは心越禪師哉

(引用は、岩波平成版『漱石全集』第一七巻による)

の一句がある。中国の春を象徴する桃花から、彼土の文人が教養として嗜んだ琴、そして、我が国に七絃琴の奏法を伝えた明末の禅僧、東皐心越を連想することは、漱石の時代にあつては未だ容易であつた。同じ頃の書簡(同書第二四巻所収、二四〇五 野上豊一郎宛)で「心越禪師の幅物」に強い関心を寄せているところを見れば、同手帳の一句、

輿に乗るは帰化の僧らし桃の花

にも心越の面影が充分に読み取れよう。近世的な所謂「文人趣味」あ

## 大庭卓也

るいは「支那趣味」が知識人の感性に連綿と息づいていた徴証であり、蓋し、両句ともに佳吟と言ふべきであろう。「桃に琴」句の「心越禪師」に関して、同書の註解(坪内稔典編)がほとんどそのまま継承した、旧岩波版『漱石全集』一二巻(昭和42)の註解(古川久編)では、

心越禪師 中国明の崇禎十五年(一六四二)―わが国の元禄九年(一六九六)。曹洞宗の禅僧。名は興儔、東皐と号し、心越はその字。延宝五年来日。徳川光圀の保護を得て、水戸の天徳寺を改築し、祇園寺と称し開山となる。『東皐全集』二巻がある。詩文の外に七絃琴をよくした。

と説明する。没年の元禄九年は、八年(一六九五)の誤記。またこの記述からは、『東皐全集』二巻が心越の著述であるようにも受け取れるが、聊かの註釈が必要である。これは、時代は降って明治四四年、祇園寺住持、浅野斧山が同寺に伝わる宝物より心越の、あるいは諸家が心越に宛てた詩文や書簡若干を撰んで刊行した、謂わば心越伝記資料集である。漱石が手取り早く心越の詩文を見ようとすれば、本書に

就いたであろう。

さて、本稿の標題に示した『野節文章』は、この『東臯全集』の基礎資料となった祇園寺の宝物中、林門の儒学者、人見竹洞（寛永一四年—元禄九年、本姓が「小野」であることから修姓を野、名を節と言い、あわせて野節と称す）の心越宛書牘八五首をまとめた卷子四軸の総称である。隠元隆琦（中国明の万暦二〇—我が国の寛文一三年）あたりを始めとする、来朝明人によってもたらされた明末清初の文化流入が、近世前期という時代の特性でもあったこと、中野三敏「都市文化の爛熟」（『日本通史14近世4』平7 岩波書店）に詳述される通りである。竹洞は、まさにその時代性を体現する人物であり、諸家との間に立つてほぼ独占的に心越との交誼をよくとりもって、心越が身につける詩、書、画、篆刻などの最新の文化が、当時の文壇へ浸透するに大きな役割を果たしている。こうした竹洞のはたらきによって、文壇がいかに鼓舞されたのか、その具体は後掲の書牘各々に就いて知られた。

筆者は先に、『野節文章』四軸に見える八五首の書牘が、竹洞が心越に宛てた書牘のほぼ総数に等しいこと、また一般に竹洞の詩文集として用いられる『竹洞先生詩文集』『竹洞人見先生後集』（国会図書館蔵写本二四卷一〇冊、以下各々を国会本『前集』『後集』と略記す。平成三年、汲古書院より『人見竹洞詩文集』として全編影印刊行さる）に、その殆どが収録されぬこと、さらには『東臯全集』が『野節文章』より採った竹洞の書牘もまたほんの一部に過ぎぬ抄録であることなどを考察し、国会本および『東臯全集』に収録されぬ天和年間〜貞享三年執筆の書牘に注解を加えて紹介した。拙稿(1)「水戸祇園寺蔵『野節文章』大概」（『雅俗』第六号 平11・1）、拙稿(2)「同（二）」（『雅

俗』第九号 平14・1）。

本稿は、これらに引き続いて貞享四年〜元禄四年執筆の書牘六首を扱い、もって心越をめぐる文壇、なかならず漢詩文壇の動向を窺おうとするものである。それは同時に、桃花を見て即座に心越が琴を弾じる姿を連想するといった、漱石あたりまでの知識人の心に大きな影を投じていた心越像の源泉を探ることもなるう。

○

さて、具体的な考証に入る。拙稿(2)では貞享三年六月までの書牘を考証しておいたが、この年の秋以降、心越は兄の蔣尚卿に会うために水戸藩の儒臣、大串元善、下川三省の同行を得て長崎往復の旅路にあった。心越より先に水戸藩に招請された明末の遺臣、朱舜水は天和二年、八三歳で既に亡くなっているが、尚卿は、この舜水の同志、張斐なる人物とともに長崎に来ていたのであった。張斐、字は斐文、号は客星、霞池など。唐代に行われた飛白の書体をよくしたと言う。柳川藩儒安東省庵と交わした筆語集『霞池省庵手簡』（享保五年跋刊一冊）があり、その詩文集『莽蒼園文藁』一冊は、永く彰考館に秘蔵されていたが、のち会沢正志斎によって嘉永四年に木活字版で刊行されるなど、我が国の文学史に微かにその名を留めている。この斐文こそが、結局は果たされなかったものの、舜水を失った水戸藩が賓客として招請しようとした人物であったこと、元善、三省の同行は張斐のひとりとなりを探査するためであったことなど、杉村英治『望郷の詩僧 東臯心越』（平1 三樹書房）に詳しい。

ただ、氏が同書において心越の江戸出立を七月（同書一三二頁）と

しているのは、祇園寺宝物中の、貞享三年の心越の詩文稿本表紙にある自筆書き入れ「貞享三年丙寅八月廿七往長崎十一月十九向都」よりして、八月のことと訂正されなければならない。また「十一月十九向都」の文言は、心越一行が長崎よりの帰路、京都の水戸藩邸に立ち寄ったこと（同書一四一頁）に合致し、氏が心越の長崎滞在を翌貞享四年正月までとする見解（同書一三七頁）も再考の余地がある。心越の簡潔な年譜として諸書に引用される『東臯全集』坤巻所載の「心越禪師略年譜」が、長崎行きを立項せぬゆえ、特にこの一事を確認しておきたい。

従って、出立を直前に控えた心越を見舞った竹洞の書牘が、即ち国会本『前集』巻一一書牘部に収録される、

・ 八月二一日執筆「寄心越」（汲古書院影印二四六下頁段）

・ 八月二六日執筆（国会本本文、日付ヲ欠クモ『野節文』章）所収の原簡本文ニヨツテ補ウ）「同」（同）

の二首であり、道中の心越に宛てた書牘が同書同巻の、

・ 九月一九日執筆「寄心越書」（影印二四七頁上段）

なのである。本稿で扱うのは、以上のような時間の流れに続く、即ち長崎より江戸に帰った心越に送られた書牘の数々であることを了解されたい。

○

次に拙稿(2)をめぐって、なお一、二のことを加えておきたい。書牘十一、十三、十五によって知られることだが、貞享二年、「富士雪添肥」句を竹洞および林家三代当主、林鳳岡など五人で一字ずつ韻字に選び、心越が描く富士図題賛の詩を詠じる催しがあった。竹洞の詩、国会本『前集』巻三所収の五言律詩「富士」（影印六七頁上段）は、貞享二年一二月に心越の添削を受けて成り、鳳岡の詩、『鳳岡林先生全集』巻一四所収の五言律詩「題富士山」は、長男宗春が一二月に夭逝したため暫く依頼を控え、翌貞享三年六月、ようやく竹洞の仲介によつて心越のもとに届けられている。分詠のメンバーは他に三人いたはずであるが、近世期の書画の優品を輯めた岡部薇香編『伝神録』（大正十年序刊五卷五冊）中に、分詠詩の一、それもほかならぬ心越の作が「釈心越行書富嶽五律」として写真版で掲出されていることに気付いた。

富士雪添肥 分韻得肥字 富士ノ雪 肥ヲ添フ 韻ヲ分ケ

テ肥ノ字ヲ得タリ

碧落暮煙微 碧落ノ暮煙 微カニ

天根幾万圍 天根 幾万ノ圍

雨従山下通 雨ハ従ヒテ山下ニ過ギ

雲向半山飛 雲ハ向ヒテ半山ニ飛ブ

九夏形堪愛 九夏ノ形 愛スルニ堪ヘ

三冬體更肥 三冬ノ體 肥ヲ更くはフ

何時藉節舎 何レノ時ニカ節ニ藉リテ舎ハン  
高掛也忘機 高ク掛カリテ也 機ヲ忘ル

時乙丑新秋書於 時ニ乙丑新秋、  
江上曲肱軒 江上ノ曲肱軒ニ書ス  
東阜心越杜多艸

韻字・微、圍、飛、肥、機（上平声五微）。本詩、祇園寺の心越自筆稿本には見えない。頷聯でその高さを、頸聯で季節によって変化するその姿を叙して、富士の雄大さを強調する。署名の「曲肱軒」は心越の識語序跋の類によく記される号で、恐らく江戸は本郷の水戸家小石川別邸内にあつた心越の居所に用いられたものであるう。説明によれば、本詩は当時、村山駒之助なる人物の所蔵である由、もとより現在の所在は知らない。末尾の年記によって書牘一一の執筆時期が確証を得たことになる。また前稿の段階で見落としていたものに、徳川光圀の詩文集『常山文集』（二〇巻序目行実各一卷一二冊）巻三に光圀の分詠詩がある。

### 富士山

分探心越禪師富士雪添 心越禪師ノ「富士ノ雪 肥ヲ添  
肥一句為韻。得添字。 フ」ノ一句ヲ分探シテ韻ト為ス。

添ノ字ヲ得タリ。

太古山頭雪 太古 山頭ノ雪  
年年華髮添 年年 華髮添フ

倒懸雲母扇 倒ニ懸ク雲母ノ扇  
高掲水晶簾 高ク掲グ水晶ノ簾  
二女舞言道 二女 言道ヲ舞ヒ  
白鷗覓景濂 白鷗 景濂ヲ覓ム  
万方皆仰止 万方 皆仰止シ  
氷柱峙三尖 氷柱 三尖ヲ峙ツ

韻字・添、簾、濂、尖（下平声十四塩）。頷聯の「雲母扇」は、雲母を摺込んだとびらの意だが、石川丈山の「富士」詩（『覆醬集』へ寛文一一年刊二卷一冊ノ巻上所収）の「雪如執素煙如柄ノ白扇倒懸東海天」句がただちに起想されよう。残るは「富士雪添肥」句の「土」字を脚韻に持つ詩のみだが、未だ目睹する機会に恵まれない。いづれにせよ『野節文章』四軸は竹洞が心越に宛てた書牘のほぼすべてを網羅する。ならば、これらの内に富士山詩分詠者として竹洞自身と鳳岡のみが言及されていると言う事実は、いま一人の分詠者が竹洞の周旋を必要とせぬ人物であつたことを意味していよう。恐らくは水戸藩側の人物かと推測するが、今後の搜索に委ねたい。

ともあれ、心越企画の富士山詩分詠は、明末清初、即ち最新の中国文化の洗礼を受けた心越の筆による富士図に対し、その姿を仰ぐかのように、水戸藩と林家という当時の江戸詩壇を代表する二つの勢力が題賛の詩を集結させると言う、極めて元禄前夜の江戸詩壇らしい性格をもった催しなのであつた。

〔凡例〕

一、本稿は、寿昌山祇園寺が所蔵する人見竹洞の東臯心越宛書牘群『野節文章』（卷子四軸分）の内から、竹洞の詩文集として一般に行われている『竹洞先生詩文集』『竹洞人見先生後集』（国会図書館蔵写本二四卷一〇冊）に未収録のものを紹介する。天和年間執筆の書牘五首（書牘一〇五）は、拙稿(1)「水戸祇園寺蔵『野節文章』大概」（『雅俗』第六号 平11・1）、貞享年間執筆の書牘および詩十首（書牘六〇一五）は、拙稿(2)「同（二）」（『雅俗』第九号 平14・1）に紹介済みである。

一、紹介は、書牘の「年時考証」、「翻字」、筆者が試みた「訓読文」、「語註」の四部で構成する。

一、書牘の所在と併せて、拙稿(1)第三節に掲出の「表二」『野節文章』・『祇園寺詩牘目録』対照表」中の仮番号を見出しの括弧内に示す。

一、漢字の旧字、異体字、俗字の類は現行の字体を用い、訓読文における仮名遣いは歴史的仮名遣いを用いる。但し、余一餘などのように、字体により意味を異にするものに関しては、旧字体を残す。一、翻字には句読点を、訓読文には併せて濁点、読み仮名等を私に付す。

一、行移り、あるいは敬意を表す空格、擡頭などの表記法は無視する。但し、日付、宛名、追啓などは改行する。

一、見せ消ち、補入などは括弧で示す。（例）「見せ消ち・哉」「補入・不」

一、虫損、破損、あるいは難読箇所については□で示す。

一、「年時考証」「語註」で国会本『竹洞先生詩文集』『竹洞人見先生

後集』に言及する際には、前者を『前集』、後者を『後集』と略称し、巻数とともにその影印本『人見竹洞詩文集』（平3 汲古書院）の頁数および上下段の別を括弧内に示す。

一六 推定貞享四年五月三日執筆書牘（『野節文章』丙軸所収・

仮番号47）

誰とは明記していないが、「二太守」とのみある人物が心越に撰述を願ったという「篆林、印雋之跋」とは、中国明代の鄭大郁撰『篆林肆考』一五巻、同じく明の梁千秋撰『印雋』四巻の跋語の謂いであり、ともに貞享四年の心越自筆詩文稿本に見える。それによれば、前者は伊予大洲藩三代藩主加藤恒泰の依頼、後者は跋語中に依頼者への言及はない。あるいは直後に出る「暘城守」、豊後日出藩二代藩主木下俊長、または追啓部に出る「成羽公」、備中成羽藩五代藩主山崎義方であろう。いずれにせよ二書ともに稀覯の書物だった筈で、いま試みに手近な目録類、『内閣文庫漢籍分類目録』『国立国会図書館漢籍目録』『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』『東京大学総合図書館漢籍目録』『尊経閣文庫漢籍分類目録』などに所在を求めてみても、『篆林肆考』は尊経閣に一本確認できるだけで、『印雋』に至っては確認できない。勿論、大庭脩『江戸時代における唐

船持渡書の研究』(昭42 関西大学東西学術研究所)にも舶載記録はない。近世前期知識人による書物の渉獵は想像以上に広範に亘っていたことが史料される。

辱勞使价。且有唐粽一筐之嘉惠。楚賢遺風<sup>(註1)</sup>、得午節之清勝。篆林、印雋之二跋<sup>(註2)</sup>、各協二太守之素願。前日所惠大字、昨、到賜城守<sup>(註3)</sup>之家送之。乃謂僕懇謝之。餘在節後之面話。不悉

蒲節前二日

餘慶頓首

東阜老禪師猊林

追啓 成羽公<sup>(註4)</sup>之印、明日逢会、即可送之。ム字忌諱未全為官命。然宜以□□改之。

かたじけな

辱<sup>かたじけな</sup>クモ使价ヲ勞サル。且ツ唐粽一筐ノ嘉惠有リ。楚賢ノ遺風ニシテ、午節ノ清勝ヲ得。『篆林』『印雋』ノ二ノ跋、各<sup>おのおの</sup>二太守ノ素願ニ協フ。前日惠マルル所ノ大字、昨、賜城守ノ家ニ到リ<sup>いた</sup>之ヲ送ル。乃チ僕ニ謂ヒテ之ヲ懇謝ス。餘ハ節後ノ面話ニ在リ。不悉

追啓 成羽公ノ印、明日逢会セバ、即チ之ヲ送ル可シ。ムノ字、忌諱ナレ

バ未ダ全クハ官命ト為サズ。然レバ宜シク□□ヲ以テ之ヲ改ムベシ。

1 端午の節句に粽を食べる風習は、五月五日、汨羅に身を投じて死んだ楚の屈原を祭ったことに始まるという梁の呉均撰『続齊諧記』の説を踏まえた表現。

2 貞享四年の心越自筆詩文稿では、『印雋』跋(欠題)、『篆林肆考』跋(単に「跋」と題す)の順で起草されている。ともに「東阜全集」坤卷八頁に翻字あり。まず『印雋』跋。末尾の年記より貞享四年五月成稿。

広陵梁子千秋『印雋』一冊。其鑄法入「見消ち・用」神。巨得六朝八代之精華。如不然亦無下手処。雖受長卿印心之秘、何斯人真造最上乘耳。

戊辰蒲月

明湖越杜多跋

次に『篆林肆考』跋。依頼者として言及される「豫州太守」は、伊予大洲藩三代藩主加藤泰恒<sup>やすつね</sup>。明暦三年生、正徳五年没、五九歳。号秉軒。王羲之流を佐々木玄龍に、持明院流を持明院基輔、基時に学んで免許皆伝を得、和漢の書に通じた。また画は木挽町狩野家二代狩野養朴常信に学び、林鳳岡撰「三幅画記」(『鳳岡林先生全集』卷九一所収)によれば、宝永二年、註3の木下俊長とともに仙洞御所に三幅対の絵を献上したこともあった。猶、泰恒の六男加藤文麗(宝永三年―天明二年)は木挽町狩野家四代狩野如川周信に学び、『文麗画譜』(安永七年刊)など斯道の専著もある。その門下に谷文晁があつたことは有名。

跋

『篆林<sup>(四)</sup>四考』、集古籀等文。乃字之始、不海内盛行。実為諸篆指南也。茲届豫州太守、嘉美斯事。繕写合帙、謂越跋数語於其後。以存「見消ち・遺」万「見消ち・□」世之篆学大成。仍真翰苑千秋之鴻宝者歟。

3 豊後日出藩二代藩主木下俊長<sup>しじなが</sup>。慶安元年生、享保元年没、六九



歳。号大年。寛文元年、家督を嗣ぐ。遠祖に木下長嘯子（永禄二—慶安二年）がある。詩、特に画技に優れ、貞享元禄の交より林門の詩文集に唱酬相手としてその名が頻出する。竹洞に、日出にある高樓の名の由来を記した「春風樓記」（『前集』卷一三、影印二五六頁上段）、俊長筆の山水画卷に寄せた「大年翁画山水跋」（『同』卷一八、影印三四八頁下段）などがある。猶、人見家の菩提寺である足利の雲龍寺所蔵の「人見竹洞先生肖像」（一軸）は、俊長が描いたもの。

4 備中成羽藩五代藩主山崎義方よしかた。寛文七年生、宝永五年没、四二歳。号麟洲。元禄元年、家督を嗣ぐ。竹洞に「麟洲説」（『前集』卷一四、影印二九〇頁上段）、また竹洞自身が字を「公訥」と命名した由来を記す「公訥説」（『同』卷一四、影印二九〇頁上段）、その家譜に寄せた「山崎家譜序」（『同』卷一五、影印三二七頁下段）などがある。

#### 一七 推定貞享五年（元禄元年）四月十四日執筆書牘（『野節文章』乙軸・仮番号51）

書中「陽城太守」、即ち木下俊長が依頼した跋語の清書を終えたかどうかを尋ね、またその草稿は完成していることを俊長に伝えたとも記している。何の跋語なのかは記されぬが、俊長が竹洞を通じて心越に何らかの跋語を依頼したという記事を国會本に索めると、貞享五年（元禄元年）初夏の撰述年記をもつ「陳雲生初度賀詩卷跋」（『前集』卷一八、影印三四四頁上段）が浮上する。この竹洞の跋に曰く、俊長四〇歳の誕生日の賀筵

を開くにあたり、偶然にも陳雲生なる人物の「強仕（四〇歳の意）之賀詩十二幅」を入手した。早速、俊長は竹洞に託して心越に見せたところ、心越は即座に、雲生は明末の宿儒で清の順治年間の人であると鑑定した。俊長は喜んで、心越に一二の賀詩のうち陳洪綬の詩に次韻して、さらに一二人の作者の素性をその後記してくれるよう依頼した。後日、俊長は一二の賀詞と心越の語を一巻の巻軸に仕立てた、と。繰り返して言うが、『野節文章』は竹洞が心越に宛てた書牘のほぼすべてを網羅する。その中で俊長が心越に依頼する跋語に言及するのは本書牘のみ、国会本ではこの「陳雲生初度賀詩卷跋」のみであり、両者を関連付けて考えることも許されよう。双方の日付が近接する点もこの推測を補強するものと見て、本書牘をこの年の執筆としておく。

こうした、心越—竹洞—俊長といった関係を見ると、ただちに想起されるのが、山内香雪編『名家手簡』に採録される竹洞の国字牘である。『江戸時代文学誌』第三号（昭58・9）の、手紙を読む会「翻刻『名家手簡』（三）」に註を施した紹介がある。そこでは不明とされる宛名の「觀瀾堂公」は、例えば『鳳岡林先生全集』卷二三所収の七言律詩「緑陰惜別」の小字註に「遊觀瀾堂。此日、主人賜暇、近頃欲帰豊後日出城。因分「渭城朝雨温輕塵」七字」とあるように俊長の堂号である。後半に「：上二書付御座候卷物、昨日、心越へ見せ申候。扱々見事ニ出来仕候とて、殊外きもつぶし申候。一、二返も巻かへし拝見いたされ候。巻初之古文も別紙ニ書付被申候。心事貴面ニく可申上候。以上」との条りがあり、「五月廿七日」の日付



をもつこの国字牘は、装丁が成った「陳雲生初度賀詩卷」を手にして心越が喜ぶ様子を、俊長に報じる文脈のようにもとれるが、憶測に過ぎるだろうか。

爾来、陰雨多湿。七茵清勝否。今日、欲趨丈室、輿僮役佗、且泥濘路滑難進、謝履。十七日之夕、十八日之朝粥後、窺閑暇之時往候。如何。陽城太守（註し）所請跋語（註し）、若既揮大手筆、則惠之幸甚。頃日、以艸稿之成話太守。太守欣々先謝之。餘事附面。不乙

孟夏十有四冀

節頓首拜

東皐老禪師猊座

追啓 忘機吟（註し）、既写了。間有難見之字。十七日、可携到。故今未璧。

爾来、陰雨フリテ湿多シ。七茵ノ清勝ナリヤ否ヤ。今日、丈室ニ趨カント欲スレドモ、輿僮ノ役佗ビ、且ツ泥濘ノ路滑リテ進ミ難ク、履クヲ謝ス。十七日ノ夕、十八日ノ朝粥ノ後、閑暇ノ時ヲ窺ヒテ往キテ候。ハン。如何。陽城太守ノ請フ所ノ跋語、若シ既ニ大手筆ヲ揮ハルレバ、則チ之ヲ惠マルレバ幸甚ナリ。頃日、艸稿ノ成ルヲ以テ太守ニ話ス。太守 欣々トシテ先ツ之ヲ謝ス。餘事ハ面スルニ附サン。不乙

追啓 「忘機ノ吟」、既ニ写シ了ル。間 見難キノ字有リ。十七日、携ヘテ到ル可シ。故ニ今ハ未ダ璧カズ。

### 1 書牘一六註3参照。

2 この跋語、竹洞撰「陳雲生初度賀詩卷跋」(『前集』卷一八所収、影印三四四上段)とあるいは関係するか。全文は次の通り。

物有不求而偶合者有。求而後合者有。求之而不合者、不求而偶合者、天能為之。求而後合者、人能為之。求之而不合者、天有違而人不遇也。各是命也。貞享丁卯冬十有二月朔、陽城侯豊大年君、及強仕。以生日会朋友親戚、開初度之賀筵。乃其令嗣俊量君、祝之也。当其時、得陳雲生強仕之賀詩十二幅。其生辰亦在至後。所謂不求而偶合者也。天使之然乎。乃知寿域之長久也。侯使余示投化僧東皐心越師。越師見之曰、「其作者明之老師宿儒而清順治年間之聞人也。旧識者多矣」。侯聞之、請越師用陳洪綬之韻作賀詩一章、特掲作者所出、以書其後。使良工裁綴為一軸、使余記其事。余曰、「求而後合者与求而不合者、皆有造意。雖善不可取之。不求而偶合者、渾然而脂合者也。其不期然而然者、可以尚之」。我於是乎揮毫而不倦矣。戊辰初夏。

後半部、陳雲生四〇歳の賀詩一二幅の作者の素性を記してくれるよう、俊長が心越に依頼した旨が記されるが、これを本書牘に言う「所請跋語」と見る。但し、貞享五年(元禄元年)の心越自筆詩文稿本には該当する跋文は見えない。

### 3 琴曲名。正しくは「鷗鷺忘機」。宮音曲。隱居自適の心境を歌う。

書牘五(推定天和三年一二月一日執筆、『野節文章』乙軸所収・仮番号84)に、その楽譜を懇望する旨が記される。

一八 推定元禄元年十月二日執筆書牘（『野節文章』乙軸所収・  
仮番号78）

徳川光圀は母、久昌院の菩提を弔うために、元禄元年八月、心越に大幅の「涅槃図」を描かせた（『東臯全集』坤巻所収「心越禪師略年譜」）。後半に「聞今畢図功」とあるのは、次の書牘一九に記す「大図之畢功」とともに、この「涅槃像」完成を言うものと理解され、執筆年時は明らかである。

追啓に、明人の小説『封神演義』末巻一弓の貸与を謝している。かの曲亭馬琴は、本書に着想を得て『殺生石後日怪談』（文政八年—天保四年刊五編三六巻）を作ったとされるが（『日本古典文学大辞典』）、竹洞の例は本書の享受、ひいては白話小説の享受史のなかでも、いち早いものとして注目されてよい。

この他『野節文章』中、書物の貸借が窺える記述を摘記しておけば、明の田藝衡撰『留青日札』三九巻、あるいは明の沈節甫抄録『留青日札摘抄』（『紀錄彙編』巻二一六所収）を指すかと想われる「留青一冊」（『野節文章』甲軸・仮番号10↓書牘一二註1参照。）、明の嚴激撰『松絃館琴譜』（『日本高僧賀章』所収・仮番号18↓書牘一四註2参照）、あるいは明の周汝登撰『四書宗旨』六巻の内かと思われる『学庸宗旨』（『野節文章』丁軸・仮番号25）などが心越より借り受けたもので、逆に竹洞が心越に貸した書物としては、明の王圻撰『三才圖會』一〇六巻、明の張大命撰『琴譜』四巻（『野節文章』丙軸・仮番号71）などが挙げられる。

昨承教、偶適他而不報。豈図、印色（註1）数面崑成。特以大洲刺史（註2）一方（註3）、印色一盒、安息（註4）一對、各達大洲藤太守。欣謝不啻鎡金双璧、使僕先演謝意。聞今日畢図功（註5）。固是、緇林万年之美事也。初三日、可往并謝。艸々。不悉

小春初二日

餘慶頓首拜

封神演義（註6） 末巻一弓、許借。多幸。

東臯老禪師猊牀

昨ハ教ヘヲ承クレドモ、偶タマ他ニ適キテ報ゼズ。豈ニ図ランヤ、印色数面（註1）崑ク成ラントハ。特ニ大洲刺史ニ方、印色一盒、安息一對ヲ以テ、各オノ大洲藤太守ニ達ス。欣謝スルコト啻ニ鎡金ノ双璧ノミナラズ、僕ヲシテ先ニ謝意ヲ演ベシム。今日 図ノ功ヲ畢ヘラルルヲ聞ク。固ニ是レ、緇林万年ノ美事ナリ。初三日、往キテ并ハセ謝ス可シ。艸々。不悉

『封神演義』一弓、借ルコトヲ許サル。多幸。

- 1 印泥の意だが、ここは心越刻の印を言うか。
- 2 書牘一六註2参照。
- 3 方印、即ち四角の印の意か。
- 4 安息香。香の名。ベンジン。

5 心越筆の「涅槃図」。釈迦入滅の情景を描いた図。中央に横臥する釈迦を配し、その周りに多くの会衆や鳥獣が慟哭する姿を描く。この時、心越は二幅描いており、日蓮宗久昌寺、身延山久遠寺にそれぞれ奉納された（前掲杉村『望郷の詩僧 東阜心越』一五九頁）。『常山文集』巻一九に、心越の涅槃図に寄せた「涅槃像賛」が見える。

釈尊仮現涅槃、為衆生示生死。易晞朝露、可惜分晷。拜此像渴仰心生。預茲会無常念起。制新様者誰。常山人子龍氏。為画図者誰。

大明僧心越子。莊嚴裝潢、夤為先妣。每歲二月望、供養以奉祀。

6 『封神伝』とも。明人の小説。作者未詳。一〇〇回。『平妖伝』

の張無咎の序に、明の隆慶（一五六七—一五七二）万曆（一五七三—一六二〇）間の作と言う。武王が神仏の助けを得て殷の紂王を征伐したことを描く。

一九 推定元禄元年十月三日執筆書牘（『日本高僧賀章』所収・

仮番号77）

昨日、すなわち書牘一八を執筆したその日に、完成した「涅槃図」大幅を見たとき記している。書牘を出した後、思い立って「涅槃図」を見に心越のもとを訪れたものか。『野節文章』丁軸は、拙稿(1)で論じたごとく水戸藩の儒臣、安積澹泊（明暦二年—元文二年）の心越宛書牘一首を含むが、それがこの年の一月七日執筆である。そのなかで澹泊も「涅槃図」を見した感動を、

…頃在公邸、観和尚所画「涅槃図」。真容凄楚、布置精妙。

春雲黯淡、草木如秋。至于七十二類匍匐号哭之態、咸窮其微。雖吳道子、張僧繇、恐不過如此。雖非俗子所可容吻、深知筆墨三昧縱橫無礙也。…

と、心越の描写筆致は、彼土で画名の高い唐の吳道子や梁の張僧繇より優るほどだと、惜しめない称賛の辞を送っている。

昨艸々接面、得見大図之畢功。固是欣幸。今日、欲往趨、偶有小恙不可。風稍服藥。明日朝飯後、暫趨謁耳。昨夕、与大洲太守（註）晤語。深感師之厚惠、欲自往謝而未果矣。而曰僕、若至則、宜懇演謝意。餘語在明日。不悉

小春初三日

餘慶頓首拜

東阜老禪師猊座

昨ハ艸々面ヲ接シ、大図ノ功ヲ畢ヘルヲ見ルヲ得。固ニ是レ欣幸ナリ。今日、往趨セント欲スレドモ、偶々たま小恙有リテ可ナラズ。風アリテ稍ヤ藥ヲ服ス。明日ノ朝飯ノ後、暫ク趨おもむキテ謁セン耳。昨夕、大洲太守ト晤語ス。深ク師ノ厚惠ニ感ジ、自ラ往みづかキテ謝セント欲スレドモ未ダ果タサズ。而シテ僕ニ曰ク、「若シ至レバ則チ、宜シク懇ねんこロニ謝意ヲ演ブベシ」ト。餘語ハ明日ニ在リ。不悉

1 書牘一六註2参照。

二〇 推定元禄三年二月十日執筆書牘（『野節文章』丁軸・仮番号80）

本書牘は、光圀の致仕に言及する。安積澹泊撰「義公行実」『常山文集』附録冊所収）によれば、光圀は元禄三年一〇月十四日に致仕し、一二月に水戸に帰っている。故にそのことを「旧牘」に心越より聞いたとする本書牘は元禄三年の執筆であろう。文面より受信地は水戸。

春來、未賀新歳。旧臈承教、黄門尊公致仕（註1）。故未及回寓館、春光将半、猶在東州。不知何日把袂結眉乎。時々彈琴望雲耳。師所校正之関雎（註2）、既已熟彈矣。松絃館譜（註3）、陳星源所傳之関雎（註4）、稍彈稍記。然從師不訂、更歎濫吹。唯渴仰回府。僕旧歳有風咳延及今春、猶未全愈。故滯音書。頃日、少愈。伏聞嘉勝、欣慰万々。小角金壹分、聊表寸忱。笑納惟幸。亮炤。不乙

仲春初十

餘慶頓首拜

東臯老禪師猊座

春ヨリ來（このかた）、未ダ新歳ヲ賀セズ。旧臈教ヘヲ承ク、黄門尊公ノ致仕セララルト。故ニ未ダ寓館ニ回ラルルニ及ズ、春光 将ニ半ナラントスルモ、猶ホ東州ニ在ラル。何レノ日ニカ把袂結眉スル乎ヲ知ラズ。時々琴ヲ彈ジテ雲ヲ望ム耳。師ノ校正スル所ノ「関雎」、既已ニ熟ツラ彈ズ。『松絃館譜』ノ陳星源伝フル所ノ「関雎」、稍彈ジ稍記ス。然レドモ師ニ從ヒテ訂ラザレバ、

更ニ濫吹ヲ歎カン。唯ダ府ニ回ラルルヲ渴仰スルノミ。僕 旧歳ヨリ風咳有リテ今春ニ延及シ、猶ホ未ダ全クハ愈エズ。故ニ音書ヲ滯ラス。頃日、少シク愈ユ。嘉勝ナルヲ伏シテ聞キ、欣慰スルコト万々タリ。小角金壹分、聊カ寸忱ヲ表ス。笑納セララルレバ惟レ幸ヒナリ。亮炤セラレヨ。不乙

1 『常山文集』附録冊所収「義公行実」に「（元禄三年）六月、参府。十月十四日、致仕。時年六十三。是日、世子襲封。十五日、任權中納言。十二月帰水戸。…」とある。

2 琴曲名。徵音曲。この心越校訂の「関雎」の譜は、現在祇園寺に自筆本が残る。竹洞が借り受けたのはこれである。半紙本一冊。薄茶無紋後補表紙（縦二二・二厘、横一五・〇厘）。題簽欠落跡に「楽府 関雎 全」と打付墨書。共紙原表紙外題「関雎 徵音 八」、中央に「一曲肱軒底本」と墨書。楽譜の後に次のような心越の跋がある。

右関雎之曲、繁文者冗、未悉其本然之妙耳。今因特協章句於首。肇得斯旨也。茂吳漸之椽。有譜文以它詞夷雜之乎。茲裁成五段。而俟知音、偽詳正焉。

東臯杜多儔并跋

即ち、註3に述べるごとく「関雎」は元來全一〇段から成る曲であるが、心越は他の曲が混入したと見て全五段に校訂したのである。  
3 正しくは『松絃館琴譜』。明の嚴激撰。二冊。二八曲を収める琴曲楽譜集。貞享三年閏三月、竹洞は心越所持本を借り受けている。書牘一四註2参照。「関雎」は本書下冊に見え、全一〇段から成る。  
4 『松絃館琴譜』所載の「関雎」には、末尾に陳源生なる人物の手譜に拠った旨を記す、次のような識語が置かれる。

余生平、心服陳星源「閑雅」妙。數年不聞忘之矣。既聞戈莊樂一奏、宛復旧觀。又數年不聞忘之矣。茲有知音者言、「莊樂獨得陳源之伝」。而雲所趙兄偶得星源手譜。余于是、延戈、趙兩君、共較于賞真齋中。戈手趙譜、前後異同、纔兩字異哉。広陵散不亡同調之幸。于是、欣然付梓、以垂永々、私識于此。知音者無爭錢兒邑之文士也。

万曆丙辰春正月既望嚴激書

二一 元禄四年七月十四日執筆書牘（『野節文章』甲軸所収・仮番号11）

日付より執筆年時は明らかである。文面より受信地は水戸。猶、中ほどに言う心越の天徳寺入山は、祇園寺宝物中の、心越自筆「入寺記譚」（「日本来由」とともに卷子一軸に装丁）の記述によれば、この年の五月二四日のことである。「心越禪師略年譜」の、入山を元禄三年五月二四日とする記述は訂正すべきであろう。

鴻雁未来、日仰長空。偶有清友来府辱承教。併惠安息香一對、朱履一緗、暑襪一双。多謝々々。一別之後、吾無斯香。往所惠之餘香秘于箱底、不叨焚之。且喜得琴壇之一佳友也。又承頃日、有天徳寺入院之事（註し）。雖非如虎丘及皐塢之美、嘗聞院地間曠花竹幽勝。且暮顧眄、不似僑居之窄乎。僕春來、有痰暈之病。近日大暑氣、體鬱々半謝世事。不能力讀典墳、唯閒日撫琴耳。更想老師之来府、不知在何日也。臨紙悵然。餘附後信。不乙

辛未中元前一日  
餘慶頓首拜

謹復

東皐老禪師猊座

豫洲（註し）、陽城（註し）各初夏述職、屢及老師之事。陽城言、若来府則、擁誓作一夕話。近日、可来。書致意耳。拙妻、兒輩亦辱承高意。多謝々々。

鴻雁未ダ来ラズ、日長空ヲ仰グ。偶タマ清友ノ府ニ来ル有リテ辱クモ教ヘテ承ク。併ビニ安息香一對、朱履一緗、暑襪一双ヲ惠マル。多謝ス多謝ス。一別ノ後、吾スノ香無シ。往ニ惠マルル所ノ餘ノ香ハ箱底ニ秘シテ、叨リニハ之ヲ焚カズ。且ツ琴壇ノ一佳友ヲ得ルヲ喜ブ也。又頃日、天徳寺入院ノ事有ルヲ承ル。虎丘及ビ皐塢ノ美ノ如クニ非ズト雖ドモ、嘗テ院地ハ間曠ニシテ花竹幽勝ナリト聞ク。且暮ニ顧眄スレバ、僑居ノ窄キニ似ザル乎。僕春ヨリ来、痰暈ノ病有リ。近日大暑氣ニシテ、體鬱々トシテ半バ世事ヲ謝ス。典墳ヲ読ムコト力ムル能ハズシテ、唯タ閒日琴ヲ撫ゾル耳。更ニ老師ノ府ニ来ラルルヲ想ヘドモ、何レノ日ニ在ルカヲ知ラズ。紙ニ臨ミテ悵然タリ。餘ハ後信ニ附サン。不乙

豫洲、陽城、各オノ初夏ニ職ヲ述ベ、屢シバ老師ノ事ニ及ブ。陽城言ヘラク、「若シ府ニ来レバ則チ、誓ヲ擁シテ一夕ノ話ヲ作サン」ト。近日、来ル可シ。書モテ意ヲ致ス耳。拙妻、兒童モ亦辱クモ高意ヲ承ク。多謝ス多謝ス。

1 天徳寺は、もと大中寺の末寺。山号は岱宗山。寛文中頃に荒廃するも、光圀が月坡道印（寛永一四―享保元）を迎えて再興、月坡の退院後、心越を住持とした。のち宝永四年、心越を開基とする曹洞宗寿昌波独立本山として寿昌山祇園寺と改称した（『東臯全集』坤卷所収「日本寿昌派祇園寺沿革一斑」）。心越はこの年の五月四日、光圀より天徳寺移住を請われ、同二四日、天徳寺入りを果たしている（心越自筆「入寺記譚」）。

2 伊予大洲藩三代藩主加藤恒泰。書牘一六註2参照。

3 豊後日出藩二代藩主木下俊長。書牘一六註3参照。

（未完）

「付記」寺宝の調査および翻刻紹介を快諾された、祇園寺住職小原宜弘師に深甚の謝意を表します。また本稿をなすに当たり、種々御教示を賜った杉村英治氏に深謝いたします。猶、本稿は平成十四年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（おおば たくや・日本学術振興会特別研究員）